江崎悌三君と私——思い出すことども

中　原　和　郎

〔稚き日の君と吾との虫語り思ひ出悲し君逝きし今日〕

私が始めて江崎君を知ったのは1910年だった．その年の夏私は浅間山て蝶を採り，昆虫世界の少年昆虫学会記事に採集品を記録したついでに，標本の交換を希望する旨附記したのがもとになって大勢の採集家と文通するようになったが，江崎君もその1人であったのである．程経て，10月頃だったと思う，本郷東片町の拙宅に突然来訪され，ミヤマモンキチョーを差し上げたと覚えている．それが江崎君との初対面であった．こゝに掲げた写真はその前年（1909）12月24日の撮影で，今から48年前，10才の頃の江崎君．後年同君からアノ頃の記念にと戴いて秘蔵しているものである．

当時10才の江崎君（東京牛込にて）

その頃，江崎君は年令に比しても小柄な少年だった．非常に静かなものごしで高い声で話をすることがなかったが，彼のこの静かな態度は終生変ることがなかった．私の家には門のわきに鈴のついたくぐり戸があって，江崎君はそれを何時もまことにゆつくり，そろそろ引き開けて入って来る．鈴が静かにしずかに鳴る．そのゆつくりした戸の引き方は「江崎さんが見えたよ」と私の母が必らず言い当てた程特徴的であった．私は時々大きな声を出すが，江崎君の声は隣室には聞えない．後になって母は「江崎さんは長時間一体何の話をしているのだろう？」と不思議に思ったと云っていたが，彼はそれ程物静かな少年だった．

最も驚異的な事実として特筆すべきは同君がその頃既に昆虫学者になることを決心し，しかもその専攻を水棲半翅類と定めて居られたことで，後年アメンボの研究で世界的な業績を残されたことと思い併せて，まことに感慨に耐えないものがある．例の少年昆虫学会記事に江崎君のタイコウチに関する一文が載っていた（1910）と思うが，これが私の知る限り同君の最初の“発表”である．矢張り水棲半翅類だった．

当時中学生だった私は，小学生の江崎君を断然後輩視していた．あの年代に於ける2～3年の年令差は大きく物を言うのであそ．私はルーマニアにモンタンドンという水棲半翅類の大家がいることを江崎君に話し「モンタンドンに勝たねばならぬ」と激励したりした．その「勝つ」というのはどんな意味だったのであろう？江崎君の家は牛込払方町だった．私も2度ばかりお訪ねしたように思う．どうして入手したのか台湾産の美しいカメムシやセミなどを沢山持って居られたと記憶する．

一緒に採集に出掛けたのは只1回．多分1912年の秋も遅くなってからだったであろう．ある日曜の早朝私の家に来られ，連れ立って中里から田端の方を半日歩いた．当時の東京はこんな所でも或る程度採集が出来たのである．江崎君は垣根に止っているチャバネヒメカゲローを見付け「脈翅類でしよう」と私にそれを採集することを許された．私も昆虫学者になるつもりで，何を専門にやろうかと，蝶→コレンボラ→甲虫などと目まぐるしく転々したあげく，丁度脈翅類に落ちついていた頃であったのである．その時代の江崎君の主な採集地は今私の住んでいる目白の“山”だったと思う．私もしばしばこの辺を荒したが，牛込に居た川合兄弟などと同行の江崎君と偶然目白の山で出会ったこともあった．その頃われわれはよく和服で袴を着け，下駄ばきで採集に出たもので，それはこの頃の人達には一寸想像もつかないであろう姿であった．

又或る時，コミズムシが鳴くのを研究しようというので，牛込と本郷とで別々に観察を始め，電話で毎日情報を交換したことがあった．こちらでガラス器の壁にコミズムシが頭をぶっつけて立てる音に首をかしげている頃，江崎君の方では前脚で顔をこすって鳴くらしいと，早くも問題の真相を捉えていた．私が江崎君と最も親しかったのはこの頃であったと思う．

大阪に引越され（1913年頃）てからは会う機会もなく，そのうちに私はアメリカに行ってしまったが，時々の文通でお互の動静は知っていた．ニューヨーク時代に私は又蝶を始め，江崎君と共著でヒメキマダラヒカゲの新亜種などを書いたことがある．江崎君は鹿児島の七高から東大に進まれ，大学を出るとすぐ九大の助教授になり，同時に欧米留学の途につかれたが，滞欧中寄せられたエハガキの数枚は今も私のアルバムの中に残っている．

アメリカで会えるかと思っていたが，私は1925年ひと足先きに帰朝したので，江崎君との再会は結局東京に於てであった．たしか1927年の8月だったと思う．ドイツで結婚されたロッテ夫人とともに拙宅を訪ねられた江崎君の背が高くなったのに驚いたが，昔のままの静かな人だった．その後は蝶類同好会，最近は日本鱗翅学会などを通じて会う機会はあったが，お互に本務の忙しさに妨げられ，江崎君が上京されても，いつも会えるとは限らない位で，いわば“細く長く”年月が経た．それでも平均1年に1回は会ったと思う．会えばいつも虫の話で持ち切った．

一昨年江崎君の尋常ならぬ病気のことを聞いて驚いた．第1回の手術材料の組織標本は九大病理から癌研に廻附され私も検鏡した．私はそれを淋巴腺原発のものと解釈し度かったのであるが，病理組織の専門家は転移であると診断した．それが正しかったのである．九大病院での治療は予期以上の効果を示していたようであるが，原発部位に手がとゞかぬので只次々と出て来る淋巴腺転移を叩くこと丈けしか出来ず，それを知っている私は辛い思いをした．この時期に到っても病苦を押してしばしば上京される江崎君に会う毎に，何にもして差し上げられないのが苦痛であった．

それにしても，余命いくばくもないことを自からも知っていたであろう江崎君が，少しも乱れることなく最後まで東ほん西走されたのは，まことに立派だった．文字通り昆虫学に一生を捧げつくした江崎悌三君であった．

江崎君と私との交遊には大きなエピソードは何にもない．嘈嘈として急雨の如き大絃もなく，切切として私語の如き小絃もなかったのだ．その静かなしらべには，しかし，余音嫋嫋として絶えざること縷の如きものがあった．そして，その縷が今切れてしまったのである．淋しい．（1957年12月21日御葬儀の日にしるす）

江崎さんを偲ぶ

竹内吉蔵

江崎さんが私よりも早く逝去されて反対に私がこのような思出を書くことになるとは夢にも思わなかった．それが思いもよらぬ悪質な病魔の襲うところとなり2度の手術も大した効果なく，遂に昨年（1957）12月14日午前2時に永眠されたのである．江崎さんは私等の期待したように稀に見る偉大な昆虫学者になられ，昆虫学界のみならず動物学界に貢献された功績は甚だ大きく，いつまでも後世に称えられ輝くことであろう．然し今のところ江崎さんでなければ出来ない問題がかなりあって皆がそれを期待していたのであるが，まだ58才の若さで逝去されたことは実に残念なことで学界の損失は甚大といわねばならない．江崎さんもそれを強く気にされたのか御遺族のお話によると何事をするにも大変死を忌み，生きぬく様につとめられたとのことである．私はそれを聞いて江崎さんの学問に対する熱情と責任感の強いのに驚き泣かずに居られなかった．然し手術の結果は医師のいうように幸いと奇蹟的に約2ケ年延命されて私等が案じていた日本昆虫学会の40周年記念大会とその展覧会をいとも盛大に会長としての大役を果され，且つ天皇陛下を展覧会にお迎えしてその案内役を無事につとめられたことはせめての慰みで江崎さんも満足されたことであろうが，これは無理をされたもので逝去をはやめたものと思われる．御葬儀は12月21日午後1時より昆虫学教室葬として九大農学部生物第2講義室に於て神式で営まれたが，お弟子さん達の真心こめた御努力によりいとも盛